

# 黒壁

泉鏡花

青空文庫



## 上

席上の各々方、今や予が物語すべき順番の来りしまでに、諸君が語給いし種々の怪談は、いずれも驚魂奪魄の価値なきにあらず。しかれども敢て、眼の唯一個なるもの、首の長さの六尺なるもの、鼻の高さの八寸なるもの等、不具的仮装的の怪物を待たずとも、ここに最も簡単にして、しかも能く一見直ちに慄然たらしむるに足る、いと凄まじき物躰あり。他なし、深更人定まりて天に声無き時、道に如何なるか一人の女性に行逢たる機会是なり。知らず、この場合には婦人もまた男子に対して慄然たるか。恐らくは無かるべし、譬之ありとするも、それは唯腕力の微弱なるより、一種の害迫を加えられんかを恐るるに因るのみ。

しかるに男子はこれと異なり、我輩の中に最も腕力無き者といえども、なお比較上婦人より力の優れるを、自ら信ずるにも関らず、幽寂の境に於て突然婦人に会えば、一種謂うべからざる陰惨の鬼気を感じて、勝えざるものあるは何ぞや。

坐中の貴婦人方には礼を失する罪を免れざれども、予をして忌憚なく謂わしめば、元來、

淑徳、貞操、温良、憐愛、仁恕等あらゆる真善美の文字を以て彩色すべき女性と謂うなる曲線が、その実陰険の忌わしき影を有するが故に、夜半宇宙を横領する悪魔の手に導かれて、自から外形に露わるるは、あたかも地中に潜める燐素の、雨に逢いて出現するがごときものなればなり。

憤ることなかれ。恥ずることを止めよ。社会一般の者ごとく強盗ならんには、誰か一人の罪を責むべき。陰険の気は、けだし婦人の通有性にして、なおかつ一種の元素なり。

しかして夜間は婦人がその特性を發揮すべき時節なれば、諸君もまた三更無人の境目を憚らざる一個の婦人が、我より外に人なしと思いつつある場合に不意婦人に邂逅せんか、その感覚果していかん。予は不幸にしてその経験を有せり。

予は去にし年の冬十二月、加賀国随一の幽寂界、黒壁という処にて、夜半一箇の婦人に出会いし時、実に名状すべからざる凄気を感じしなり。黒壁は金沢市の郊外一里程の所にあり、魔境を以て国中に鳴る。けだし野田山の奥、深林幽暗の地たるに因れり。ここに摩利支天の威霊を安置す。

信仰の行者を除くの外、昼も人跡罕なれば、夜に入りては殆ど近くものもあらざるなり。

その物凄き夜を扱えらびて予は故ことらに黒壁に赴こけり。その何のためにせしやを知らず、血気に任ませて行ふるいたりし事どもは、今に到いたりて自みからその意りを了りするに困くるむなり。昼間黒壁に詣いたりしことは兩三回なるが故に、地理は暗そらじ得たり。提灯の火影に照らして、闇くらき夜道をものともせず、峻しゅん坂、嶮路けんろを冒おかして、目的の地に達せし頃は、午後十一時を過ぎつらん。摩利支天の祠もつに詣もつずるに先立ちて、その太みき三み拱かえにも余りぬべき一本杉の前を過ぐる時、ふと今の世にも「丑うしの時とき詣まいり」なるものありて、怨ある男を咒のろう嫉妬深き婦人等の、此処に詣きで来て、この杉に釘を打つよし、人に聞きしを懐おもいでたり。

げに、さることもありぬべしと、提灯を差さ翳かして、ぐるりと杉を一周せしに、果せるかな、あたかも弾丸の雨注せし戦場の樹立こたちの如き、釘を抜取りし傷痕ありて、地上より三四尺、婦人の手の届かんあたりまでは、蜂の巢を見るが如し。唯ただ単に迷信のみにて、實際なりた成立たざる咒のろいにもせよ、かかる罪惡を造る女心の浅ましく、はたまた咒のろわるる男も憐むべしと、見るから不快の念に堪えず直ちに他方に転ぜんとせし視線は、端はし無くも幹の中央はしなに貼はりつけたる一片の紙に注つげり。

と見れば紙上に文字ありて認めしたられたるものの如し。

予は熟視せり。茂れる木の葉に雨を凌しのげば、墨の色さえ鮮明に、

「巳の年、巳の月、巳の日、巳の刻、出生。二十一歳の男子」と二十一文字を記せり。

第一の「巳」より「男」まで、字の数二十に一本宛ずつ、見るも凄まじき五寸釘を打込みて、僅わずかに「子」の一文字を余あませるのみ。

案ずるに三七二十一日の立願りゆうがんの二十日の夜は昨夜に過ぎて今夜しもこの咒咀のろいぬし主が

満願の夜にあらざるなきか。予は氷を以て五体を撫でまわさるるが如く感せり。「巳の年

巳の月巳の日巳の刻生」と口中に復誦するに及びて、村沢浅次郎の名は忽たちまち脳裡のうりに浮びぬ。

実に浅次郎は当年二十一歳にして巳の年月揃あはいたる生なり。或あるは午うまに、或あるは牛うしに、此こんは

般んの者も多かるべし。しかれども予が嘗かつて聞き知れる渠かれが干支かんしの爾しかく巳を重ねたるを奇異

とせる記憶は、咄嗟とつさに浅次郎の名を呼よび起おこせり。しかも浅次郎はその身より十ばかりも年と

嵩しかさなる艶婦ちぎりに契こを籠こめしが、ほど経て余りにその妬深ねたみきが厭いとわしく、否寧むしろその非常

なる執心の恐ろしさに、おぞ毛けを振ふるいて、当時予が家に潜めるをや。「正に渠こなり」と予

は断定しつ。文化、文政、天保間の伝奇小説に応用されたる、丑の時詣さんたんなんど謂えるもの

の實際功を奏すべしとは、決して予の信ぜざるところなるも、この惨怛さんたんたる光景は浅次

郎の身に取りて、喜ぶべきことにはあらずと思いき。

浅次郎は美少年なりき。婦人に対しては才子なりき。富豪の家の次男にて艶冶えんやむちよう無腸むちようの

若旦那なりき。

予は渠を憎まず、却りてその優柔なるを憐みぬ。

されば渠が巨多の金銭を浪費して、父兄に義絶せられし後、今の情婦某年紀三十、名を艶と謂うなる、豪商の寡婦に思われて、その家に入浸り、不義の快樂を貪りしが、一月こそ可けれ、二月こそ可けれ、三月四月に及びては、精神騰として常に酔るが如く、身軀も太く衰弱しつ、元氣次第に消耗せり。

こは火の如き婦人の熱情のために心身両ながら溶解し去らるるならんと、ようやく渠を恐るる気色を、早く暁りたる大年増は、我子ともすべき美少年の、緑陰深き所を厭いて、他に寒紅梅一枝の春をや探るならんと邪推なし、瞋恚を燃す胸の炎は一段の熱を加えて、鉄火五鉢を烘るにぞ、美少年は最早数分時も得堪えずなりて、辛くもその家を遁走したりけるが家に帰らんも勘当の身なり、且は婦人に搜出だされんことを慮りて、遂に予を便りしなり。予は快く匿いつ。

しかるに美少年はなお心を安んぜずして言いぬ。

「彼の婦人は一種の魔法づかいともいふべき者なり。いつぞや召使の婢が金子を掠めて出奔せしに、お艶は争で遁すべきとて、直ちに足留の法といえるを修したりき、それかあ

らぬか件の婢は、脱走せし翌日より遽に足の疾起りて、一寸の歩行もなり難く、間近の家に潜みけるを直ちに引戻せしことを目撃したりき。その他咒詛、禁厭等、苟も幽冥の力を仮りて為すべきを知らざるはなし。

さるからに口説の際も常に予を戒めて、ここの性悪者め、他し女子に見替えて酷くも我を棄つることあらば呪殺してくれんと、凄まじかりし顔色は今もなお眼に在り。

と繰返しては歎息しつ。予は万々然ることのあるべからざる理をもて説諭すれども、渠は常に戦々兢々として樂まざりしを、密かに持余せしが、今眼前一本杉の五寸釘を見るに及びて予は思半ばに過ぎたり。

## 上の二

有恚予は憐むべき美少年の為に、咒詛の釘を抜棄てなんと試みしに、執念き鉄槌の打は到底指の力の及ぶ所にあらざりき。

洵に八才の龍女がその功力を以て成仏せしというなる、法華経の何の巻かを、誦じては抜き、誦じては抜くにあらざれば、得て抜くべからざるものをや。



誰にもあれ人無き処にて、他に見せまじき所業を為せばその事の善悪に関わらず、自から良心の咎むるものなり。

予も何となく後顧うしろぐらき心地して、人もや見んと危あやぶみつつ今一息と踏張ふんばる機会に、提灯の火を揺消ゆりけしたり。黒白こくびやくも分かぬ闇夜となりぬ。予は茫然として自失したりき。時に遠く一点の火光あかりを認めつ。

良有やりて予はその燈影なるを確たしかめたり。聽やがて視線の及ぶべき距離に近ちかきぬ。

予が曩さきに諸君に向いて、凄まじきものの経験を有せりと謂いしは是こゝなり。

予は謂いえらく、偶然人の秘密を見るは可よし。然しかれども秘密を行う者をして、人目を憚おそふるまい、見られたりと心着かしめんは妙ならず。ために由よし無うき怨うらみを負おうて、迷惑することもありぬべしと、四辺を見廻わして、身を隠すべき所を覓もとめしに、この辺には屢しばしば見る、山腹を横うがに穿うちたる洞穴を見出したり。

要もとこそあれと身を翻して、早くも洞中に潜むと与ともに、燈の主は間近に來りぬ。一個の婦人なり。予は燈影を見し始はじめより、今夜満願こよひに當るべき咒詛主すわの、驚破おどや來ると思ひしなりき。

霜威そうゐの凜冽りんれつたる冬の夜に、見る目も寒く水を浴びしと覺おぼしくて、真白ひとえの単衣ひとえは濡紙ぬしを

貼りたる如く、よれよれに手足に絡まといて、全身の肉附は顕あらわ然に透きて見えぬ。霑うるおいたる緑の黒髪は颯さつと乱れて、背と胸とに振分けたり。想うに、谷間を流るる一ひとすじ条の小川は、此処に詣ずる行者輩の身を淨きよむる処なれば、婦人も彼あすこ処にこそ垢離こりを取れりしならめ。

と見る間に婦人は一本杉の下に立寄りたり。

ここに於て予がその婦人を目して誰なりとせしかは、予が言を待たずして、諸君は疾とつに推し給わむ。

予は洞中に声を呑みて、その為せんようを窺うかがいたり。渠は然りとも知らざれば、金燈籠に類したる手提の燈火を傍に差置き、足を爪立てて天を仰ぎ、腰を屈かがめて地に伏し、合掌しつ、礼拝しつ、頭を木の幹に打当つるなど、今や天地は己が独有に飯かえせる時なるを信じて、他に我を見る一双の眼あるを知らざる者にあらざるよりは、到底裏うらは恥はずかしく、為しがたかるべき、奇異なる挙ふるまい動ほしを恣しまにしたりとせよ。

最後に婦人は口中より一本の釘を吐出はきして、これを彼二十一歳の男子と記したる紙片に推当おしあて、鉄槌てつちをもて丁ちよう々ちようと打ちたりけり。

時に万籟ばんらい寂せきとして、地に虫の這う音も無く、天は今にも降ふせんずる、霰みぞれか、雪あられか、霰あられか、雨あめかを、雲の袂たもとに蔵たくわしつゝ微音をだに語らざる、その静しずかに睡かりたりし耳元に、「カ

チン」と響く鉄槌の音は、鼓膜を劈きて予が腸を貫けり。

続きで打込む丁々は、滴々冷かなる汗を誘いて、予は自から支えかぬるまでに戦慄せり。

剩え陰々として、裳は暗く、腰より上の白き婦人が、長なる髪を振り乱して、その姿の凄じさに、予は寧ろ幽霊の与易さを感じてき。

釘打つ音の終ると俛く、婦人はよろよろと身を退りて、束ねしものの崩るる如く、地上にと膝を敷きぬ。

予をして謬たざらしめば、首尾好く願の満ちたるより、二十日以来張詰めし氣の一時に弛みたるにやあらん。良ありて渠の身を起し、旧来し方に皈るを見るに、その来りし時に似もやらで、太く足許のきたりき。



# 青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 泉鏡花集 黒壁」ちくま文庫、筑摩書房

2006（平成18）年10月10日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 別巻」岩波書店

1976（昭和51）年3月26日第1刷発行

初出：「詞海 第3輯第9巻、第10巻」

1894（明治27）年10月、12月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 黒壁 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>